2017. 06. 25 北海道新聞

救急蘇生法を模型使い体験

親子防災教室

【帯広】親子防災教室が24日、帯広市のとかちプラザで開かれた。救急蘇生講習では約250人が心臓マッサージの方法と自動体外式除細動器（AED）の使い方を学んだ。

宮坂建設工業（帯広）の主催で3回目。参加者は、上半身のイラストが描かれたシートや樹脂製の心臓模型を使って心臓マッサージを体験した。

講師を務めた帯広消防署の救急救命士佐藤悦弘さんは「手と手を組み心臓に当て、5センチの深さで押して」と指導。参加者は1分間に約110回のテンポで模型を押した。

音更小2年の若林陽人（はると）君(7)は「難しかったけど、実際に人が倒れていたら助けてあげたい」と話した。

会場では、遊びながら消火器の使い方や紙食器の作り方を学べる防災カードゲームが行われたほか、昨夏の台風で被災した札内川や音更川の復旧工事がパネルで紹介された。

（米田真梨子）

心臓マッサージの方法を学ぶ参加者ら（舘山国敏撮影）

2017. 06. 27 北海道建設新聞

親子防災教室 500人が参加

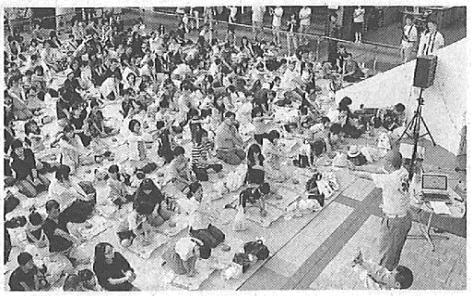
宮坂建設工業

【帯広】宮坂建設工業（本社・帯広）は24日、帯広市内のとかちプラザで親子防災教室を開催した。市内などから500人の親子連れが参加。心肺蘇生術を体験したほか、災害時に役立つ知識が得られるカードゲームを紹介した＝写真。

同社は2003年から市内の中央公園で住民参加型の防災教室を毎年開いている。14年8月に広島県の土砂災害で支援を行った際、避難所で多くの親子連れに接したことがきっかけで、体験型の防災イベントを企画。ことしで3回目となる。

宮坂寿文社長は「災害時は自分で自分を守らなければならない。たくさんのことを学んでほしい」と呼び掛けた。

会場のアトリウムで開かれた子ども向け心肺蘇生キットを使った親子での心肺蘇生講習では、帯広消防署救急課の佐藤悦弘専門員が講師となり、心臓の位置や胸部圧迫のこつなどを解説。別会場では昨年の台風災害と復旧工事の様子をパネル展示。災害時に役立つ知恵や手順を遊びながら覚えるカードゲームのコーナーを用意。消火器の使い方や止血方法をクイズ形式で子どもたちに教えた。



2017. 06. 27 北海道通信

宮坂建設工業が親子防災教室

適切な対処方法学ぶ

500人参加 防災への理解深める

【帯広発】宮坂建設工業㈱（帯広、宮坂寿文社長）は二十四日、帯広市内のとかちプラザで第三回親子防災教室を開催した。会場には子ども連れの家族を中心に約五百人が来場。模擬AEDを使用した救急蘇生講習などを通して、有事の際における適切な対処方法や、防災に対する理解を深めていた。

同社では、平成五年から災害発生時における地域住民の安全確保等に資するため、地域住民参加型の防災訓練を実施。二十六年八月に発生した広島土砂災害では、実際に被災者支援として炊き出し活動に取り組むなど、これまでの訓練の成果が着実に発揮されている。

一方、被災地や避難所では、女性や子どもの姿も多く見受けられたことから「社会基盤の整備を担う立場として、ハード面だけでなくソフト面においても取り組んでいかなくてはならない」との思いで、二十七年から親子防災教室を開催している。

冒頭、あいさつに立った宮坂社長は「今後の災害のキーワードは〝自分の身は自分で守る〟〝自分の家庭は自分で守る〟ということ。ちょっとした工夫によって、大きな災害を最小限の被害でとどめることができる」とし、親子防災教室で学んだ知識が今後に生かされるよう期待した。

メーンイベントの「親子でPUSHコース体験」では、模擬AEDを用いて救急蘇生講習を実施。帯広消防署の職員が心臓マッサージや、AEDの使用方法などを指導した。実際に体験できる参加型の内容ということもあり、会場は子ども連れの家族で満員に。参加者は「いざという時の対処法が分からなかったので、とても勉強になった」などと感想を話した。

さらに、「薬剤師さんからの薬の飲み方」「身の回りのモノを使った応急手当」と題した講習を行ったほか、災害時の対応を考えるカードゲーム、防災パネルや防災グッズを展示した会場も用意。昨夏の台風災害の復旧工事の写真、進捗状況なども紹介し、来場者は展示物を前に足を止めるなど、高い関心を寄せていた。

親子で救急蘇生法の手順などを学んだ

2017.07.12 十勝毎日新聞

催し

◆宮坂建設工業（帯広）の親子防災教室

帯広市内のとかちプラザで開かれた。約250人の親子が参加。心臓マッサージやAED（自動体外式除細動器）の使い方を学んだ

＝写真。

同社は十勝沖地震（2003年）を契機に、地域に向けた防災訓練を毎年開催。15年からは家族で参加できる防災教室も行っている。6月24日は帯広消防署の佐藤悦弘さんがマッサージの手順を説明。早く絶え間なく行うことや、「意識や呼吸がないことを確認したらすぐに実践して」と呼び掛けた。

市内から参加した藤本煌逞（こうた）君（6）は「（圧迫）音がうまく鳴らせてよかった」、父親の崇之さん（44）は「全く知識はなかったが勉強になった」と話した。

このほか、昨年の台風災害や復旧状況を伝える写真、非常食の展示なども行われた。